

メッセージアウトライン

ヤコブの手紙 1:12~15 「いのちの冠」

[12] 「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです」

イエスはマタイ5章の山上の説教で「悲しむ者は幸いです…」(4)、「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです…」(11~12)と教えられた。ヤコブ 1:12の「幸い」ということばもイエスの教えられたことばと同じである。それゆえここで言われている「幸い」とはこの世において、また天において私たちが神から受ける報いに関係があることがわかる。具体的には試練を耐え抜いて良しと認められることによって神からいのちの冠を受けることができるのである。

世にはいろいろな冠があるが聖書の言う「いのちの冠」とは神を愛し、さまざまな試練に耐え抜いた信仰者に与えられるものである。私たちが神を愛し、その代価がいかに高くてもみことばに従い忠実に主に仕えていくなれば神からの豊かな祝福が与えられる。このことを私たちは決して忘れてはならない。

[13-14] 「だれでも誘惑にあったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです」

ここでは神に責任を転嫁することはできないことが教えられている。神は悪に誘惑されることも、人を誘惑されることもないお方である。ではだれが人を悪に誘惑するのか。サタン(悪魔)のせい。サタンは最初に神によって造られた人間アダムとエバを誘惑し堕落させた(創世記3章)。またイエスの公生涯の初めに荒野でさまざまな誘惑に会わせた。(マタイ4章) たしかにサタンは誘惑者である。しかし、そうであっても私たちは自分に最終責任があることを知らなければならない。それゆえヤコブはここでサタンのことにはひとことも触れていない。アダムは自分の欲に引かれて罪を犯してしまった。サタンが無理やり彼に罪を犯させたのではない。そしてアダムは自分が罪を犯したことをエバのせいにし、エバはそれを蛇(サタン)のせいにした。このような性質はすべての人間が受け継いでいる。しかし、責任は自分にあるのである。よく言われることば→「鳥が頭の上を飛ぶことは妨げることはできないが、鳥が自分の頭に巣を作らせないでおくことはできる」 イエスは聖書のみことばによってサタンを撃退し、アダムは自分の頭に巣を作らせてしまった。これが自分の欲に引かれ、おびき寄せられるということの意味である。もし罪に共鳴するものが人間の中に何もなかったならば罪は無力であっただろう。しかし、神は人間をそのように何も感じないロボットのような者には造られず、自分で判断し決断する完全な自由を与え、それに伴う責任も与えられたのである。それゆえ責任は人間自身にある。

[15] 「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます」

死とは単にこの世のいのちが終わるということだけではない。永遠に神と離

され、ひとかけらの希望もなく地獄において呪いと絶望の中で永遠に苦しまなければならない刑罰なのである。

→黙示録 20:11~15

罪は目に見える特定の行動となった時に始まるのではなく、自分の中に何らかの貪欲な願望が生じ、それが温められ増大していくところに始まる。私たちが見聞きするさまざまな事件もそのようにして最初は心の中から始まる。

私たちは人生において多くの誘惑にさらされる者であるが、それを責任転嫁することなく戦い、あるいは退け、正しい判断をもって神に従うほうを選ばなければならない。その代価がいかに高くても、神のみことばに従い、神を愛し、忠実に仕えていく者に神からの豊かな祝福、いのちの冠が与えられるのである。

自分の欲望に身を任せて誘惑に乗り、罪の人生を歩み、死と滅びに至るか、試練に耐え抜いていのちの冠をいただく者となるのか、その決断は私たち自身にゆだねられている。私たちは正しい決断をし、最後まで主に従い続け、豊かな祝福といのちの冠をいただく者になりたい。

しかしこのことは自力で頑張るということではなく、私たち信仰者に与えられている御霊の助け、御霊により頼んでいくことによって可能となるということも覚えておかなければならない。→ I コリント 6:19、ガラテヤ 5:16、エペソ 3:16、ピリピ 4:13、ローマ 8:5~6,26~27